

# マエストロ・バッティストーニからのメッセージ

日本の聴衆の皆様、そして東京フィルハーモニー交響楽団の皆様、こんにちは。

東京フィルの新しい首席客演指揮者として、皆様に自己紹介できますことを大変光栄に思っております。おそらく皆様の中には私のジェノヴァのカルロ・フェニーチェ劇場での活動を御覧になった方もいらっしゃると思いますが、私にとって、とても重要なジェノヴァと同じように、東京にも度々帰る事のできるホームグラウンドが得られることを、とても嬉しく思っています。

初めて共演した時から、この素晴らしいオーケストラの元に、舞台上、またオーケストラピットの中でもできる限りたくさんお会いしたいという願いが私の心に芽生えました。そして、来年からこのオーケストラと共に活動し、音楽の道を探求できる関係を得られたことに、心より満足しています。

これから長きにわたって共に力を合わせていく時間がある事を思うと、私は大きな喜びと責任感とで胸が一杯になります。私達が一緒に作業をしていく上で、いろいろとアイデアがあるのですが、それらの案は主に3つの領域に分けられます。第一の領域としては、イタリア人作曲家によるオーケストラのための重要な作品を見出し、その価値を再認識して演奏していくことが挙げられます。これらの作曲家は概してオペラ作曲家として著名なのですが、その多くは特に1900年代に交響曲においても極めて興味深い作品を残してきました。

最初の時期に臨むコンサートには、ロッシーニやヴェルディといったオペラ作曲家の作品を加えるつもりです。ロッシーニの歌劇「コリントの包囲」序曲やヴェルディの歌劇「シチリア島の夕べの祈り」からの舞踏曲に添えて、純然たる交響曲作品であるジャコモ・プッチーニの交響的前奏曲、あるいはオットリーノ・レスピーギのバレエ組曲「シバの女王ベルキス」を加えることにより、ローマ三部作の大成功後にレスピーギが手がけた作品をさらに深めてもいけるでしょう。

第二の領域として一緒に取り組みたいのは、オペラ作品の演奏会形式上演です。これにより、熱烈な音楽愛好家の方には、舞台的要素を削ぎ取られた作品としてのオペラを、純粹に音楽的な観点から味わえるという、感興を大いにそそられる機会となることでしょう。

最初に上演したいオペラ作品は、私がおそらく他のどのオペラより愛する、ジャコモ・プッチーニの「トゥーランドット」です。この作品のスコアは、極めて豊潤な輝きに満ちている上に、舞台面や話の筋立てのみに関してではなく、主に音楽的観点からも非常に興味深い管弦楽法によって、こういう機会ケースに申し分ないほど適しています。その音楽は、ドビュッシー、ラヴェル、バルトーク、ストラヴィンスキーといった、プッチーニと同時代のヨーロッパに生きた大作曲家全ての影響を糧としており、これらの基本的な要素は、演奏会形式の際に聴き分けがさらに明瞭となる事でしょう。東京フィルと共に、ステージには国際的レベルの大歌手を迎えます。

最後に第三の領域では、当然ながら時代も国も学派も異なる伝統的な交響曲レパートリーの探求も手がけます。

来年の9月に行うコンサートのいずれかでは、そういった趣き、曲目といったものをできるだけ組み合わせたいと考えており、ある意味でイタリアとロシアが溶けあう様な試みです。

例えば、ヴェルディ『運命の力』から序曲を取り上げますが、このオペラはサンクトペテルブルグにて初演されたオペラであり、ロシアとイタリアの初の懸け橋となった作品でもありました。

その他にも、管弦楽版によるラフマニノフの『5つの音の絵』も取り上げますが、その編曲者がオットリーノ・レスピーギなので、この管弦楽編曲は、ロシアの偉大な指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーによって委嘱されたものであり、クーセヴィツキーはモーリス・ラヴェルに有名な『展覧会の絵』の管弦楽編曲を託したことで知られています。この様に、東京フィルの奏者の皆様と共に、文字通り縦横全方向的に音楽の歴史を探求していきたいと思っています。

奏者、スタッフ一同を含む東京フィルの方々に心からの挨拶を送りますと共に、来シーズンには東京にて皆様をお待ち申し上げております。皆様とご一緒する新たなシーズンは白熱したものになるでしょう。

皆様のもとへお邪魔する日が待ち遠しくてたまりません。

ありがとうございました。